

〈生徒指導・教育相談〉

開発的・予防的生徒指導を目指したチームによる支援の工夫

ー「クラス支援シート」を活用した拡大学年会を通してー

沖縄県立具志川商業高等学校教諭 仲間 貴彦

I テーマ設定の理由

近年、核家族化や少子化、情報化などが進展する中で、児童生徒の規範意識の低下や問題行動の複雑化・多様化が指摘されている。平成 28 年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（平成 29 年 10 月文部科学省）によれば、いじめの認知件数は、県内公立の小中学校・高等学校・特別支援学校の合計が 12,482 件（昨年度比 10,265 件増）、また県立高等学校における不登校の人数は 1,510 人（昨年度比 213 人増）、1,000 人当たりにおける生徒数は全国でワースト 1 位（平成 27 年度ワースト 2 位）である。また、急速に普及するスマートフォンを利用し、平成 28 年におけるコミュニティサイトを通じて児童買春や児童ポルノ等の犯罪被害にあった子どもは過去最多で 1,736 人（前年比 84 人増）、内訳は高校生が 51%と半分を占めている。その他、子どもの貧困や人間関係作りに課題を抱えた児童生徒の支援への取組等、教師が担う生徒指導の役割が多岐にわたり、各教師の指導、支援に重きをおいた生徒指導だけでは十分に解決することが難しい現状である。

これまでの教職経験における、生徒指導を振り返ってみると、問題行動を起こした生徒に対する指導は、生徒指導委員会で指導内容の検討をした後、職員会議で決定し、具体的な指導については、面談や奉仕活動等を通して、問題行動がいけない理由、社会のルールを守ることの大切さ等を理解させ、反省、再発防止に向け行動改善を促してきた。つまり、問題行動が起こった後に対応・指導を行う問題解決的生徒指導が主であった。しかし、このような従来の問題解決的生徒指導では、現在の多様な問題には十分な対応が難しくなっている感がある。

所属する高校においては、複雑な家庭環境の中で育ってきたことにより人間不信を伴う根深い負の感情をもっている生徒、コミュニケーションスキルの未熟さなどから、周囲の人間関係に問題を生じている生徒、相手を傷つける言動をとる生徒がいる。また、学校生活における様子や表情からは読み取りにくい、内面に課題を抱える生徒への対応の重要性も増している。

このように、多様な状況における問題に応じた生徒指導を行うには、問題解決的生徒指導だけではなく、すべての生徒に対して、個性、自尊感情、社会的スキルを育む開発的生徒指導や、問題行動を起こす可能性のある生徒に支援を行う予防的生徒指導が大切である。

さらに、開発的生徒指導や予防的生徒指導を効果的に行う為には、関係職員でクラスの課題における要因の把握及び具体化した支援方法を共有し、それぞれの役割の明確化を図り、組織的に支援を行う為の体制作り（チームによる支援）が必要だと感じる。このような機能、体制を持つ校内の会議として拡大学年会があり、その会議にチームによる支援を取り入れることを考えた。

また、クラスまたは個人を見立て、支援策を検討・実施に向けて記録するシート（クラス支援シート）を活用することで、対象クラスや生徒の情報を可視化でき、支援方針や支援方法の共有及び支援者の役割分担が明確になり、効果的な支援に繋がることを期待できる。

拡大学年会において、クラスの課題に対する支援及び学校環境への適応の促進を目指し、職員間で課題と手立ての共有、支援の実施等チームによる支援を「クラス支援シート」の活用を通して行うことで、問題行動の早期発見・未然防止に向けた、開発的・予防的生徒指導につながると考え、本テーマを設定した。

〈研究課題〉

開発的・予防的生徒指導を目指したチームによる支援の取組として、「クラス支援シート」を活用し

た拡大学年会についての研究を行う。

Ⅱ 研究内容

1 生徒指導について

(1) 生徒指導とは

生徒指導提要において生徒指導とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」であり、「生徒指導は、すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよい発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指す」「各学校においては、生徒指導が、教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、その一層の充実を図っていくことが必要である」(図1)と示されている。よって、生徒指導は、すべての児童生徒に対して、学校教育活動全体を通じて行われるものであり、「自己指導能力の育成」が生徒指導の根本であると考えられる。

坂本昇一(1990)は「生徒指導とは、子どもたちの自己指導能力の育成を目的として教育活動全体に作用する機能である」とし、具体的には「自己存在感」「共感的人間関係」「自己決定」の三つの機能をあげ、これらを全教育活動に作用させるべきであると述べている(表1)。さらに、日々の教育活動に留意することとして、これら生徒指導の三つの機能を取り入れる指導が望ましいと考える。

(2) 生徒指導の方法について

八並光俊・國分康孝(2008)によると、三つの生徒指導について、次のように述べている(図2)。

① 開発的生徒指導

開発的生徒指導とは、すべての子どもを問題行動の予防や子どもの個性、自尊感情、社会的スキルの伸長に力点を置いた成長を促す生徒指導である。例えば、非行防止教育、犯罪被害防止教育、構成的グループエンカウンター、ピアサポート、ソーシャルスキルトレーニングなどである。

② 予防的生徒指導

登校をしぼる、保健室に頻繁に行く、早退や欠席が目立ち始めるなど、一部の気になる子どもに対して、初期の段階で問題解決を図

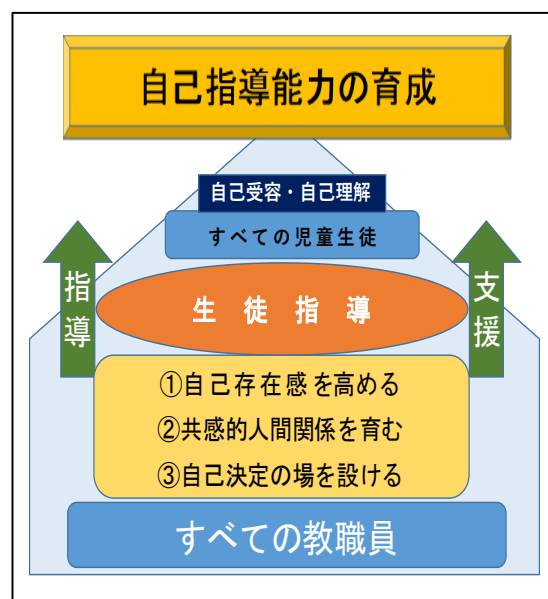


図1 自己指導能力の育成について
(山口県教育委員会 2011 「よりよい生徒指導に向けて」より一部改変)

表1 生徒指導の三機能

①児童生徒に自己存在感を与える
②共感的な人間関係を育成する
③自己決定の場を与え、自己の可能性の開発を援助する

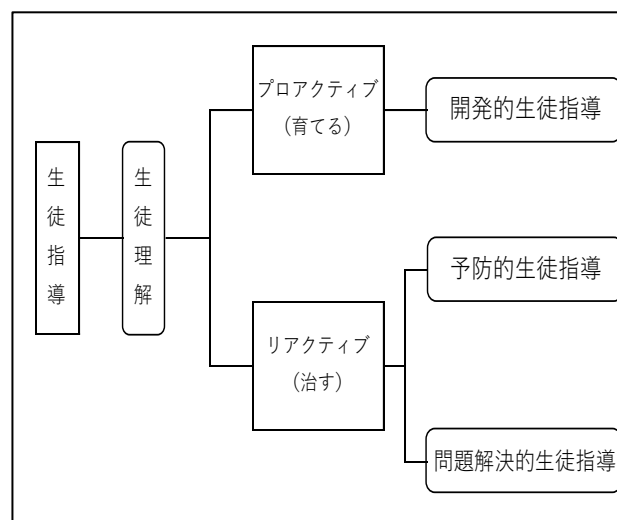


図2 生徒指導の実践モデル
(八並・國分 2008 「新生徒指導ガイド」より)

り、深刻な問題へ発展しないように予防する生徒指導である。

③ 問題解決的生徒指導

いじめ・不登校・暴力行為・性の逸脱行為・薬物乱用など、深刻な問題行動の悩みを抱えている特定の子どもに対して学校や関係機関が連携して問題解決を行う生徒指導である。

(3) 開発的・予防的生徒指導の有用性について

石川美智子（2015）は「生徒指導提要」に示されている「生徒指導は、すべての児童生徒の人格のよりよい発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で、充実したものになることを目指す」ことから、「治療的生徒指導ではなく、発達を促す開発的生徒指導が中心的な役割を担う」と述べている。

また諸富祥彦（2013）は「これからの生徒指導では、生徒のさらなる成長を促進する『成長を促す生徒指導』や問題が起きる前に予防する『予防する生徒指導』が、中心になっていく」と述べており、問題行動を減少させるためには、問題解決的生徒指導だけではなく、開発的生徒指導、予防的生徒指導を行うことが大切であり、生徒の心のありようを組織で多面的・多角的に分析・対応することが求められている。

2 生徒指導体制について

(1) チームによる支援について

生徒指導提要には「複雑化・多様化する児童生徒の問題行動等を解決するためには、学級担任・ホームルーム担任が一人で問題を抱え込むのではなく管理職、生徒指導担当、教育相談担当、学年主任、養護教諭など校内の教職員や、スクールカウンセラーなどの外部の専門家を活用して学校として組織的に対応することが重要」「組織的対応の有効な方法の一つとして、チームによる支援」が挙げられており、問題行動については、「チームによる組織的対応によって、早期の解決を図り、再発防止を徹底することが重要」と示されている。

また、諸富（2013）は「大切なのは、問題を担任一人で抱え込まないこと」「学級担任一人での指導には限界がある。組織として対応できるよう職員の役割分担を明確にし、ケース会議の開催や定例化、事例検討等を実施することで、支援方法を共有でき、効果的な支援につながる」と述べている。これらのことから、複雑化・多様化した問題を解決する際、問題の把握は支援者一人の情報では不十分であるため、担任や教科担任等、児童生徒と関係のある職員との情報交換等から、児童生徒を多面的・総合的に理解する必要があると考える。

そこで本校においては、チームによる支援を取り入れる組織として拡大学年会が有効に機能する場であると考え。本校の拡大学年会はHR担任、教科担任、学年主任、生徒指導担当、教育相談係、養護教諭などで構成される。そこでは、毎学期に一回、学期末考查を終えた時期に会議が設定され、各学年、成績不振の生徒や勤怠状況の悪い生徒について、担任と教科担当等が情報共有を図る。また「クラスにおける課題及びその支援について話し合う時間」（以下「クラス支援会議（仮）」）も設けられており、その会議において、チームによる支援を取り入れていく。

(2) チームによる支援のプロセスについて

チームによる支援のプロセスの例（図3）として、①支援の要請、②アセスメント、③個別の支援計画の作成、④チームによる支援の実施、⑤評価に至るまで繰り返す流れが示されている。また、生徒指導提要によるとチームによる支援の三つのタイプが挙げられている（表2）。

表2 チームによる支援の三つのタイプ（文部科学省 2010 「生徒指導提要」より）

校内連携型	校内の複数の教職員が連携して、援助チームを編成して問題解決を行う。
ネットワーク型	学校と教育委員会、関係機関等がそれぞれの権限や専門性を生かしてつながっていく。
緊急支援（危機対応）型	自殺、殺人、深刻な児童虐待、薬物乱用など、学校や地域における重大な混乱を生じる事態に対して、緊急対応を行う。

本研究においては、学校、学年、クラスの現状を踏まえて、チームによる支援のタイプとして「校内連携型」、チームによる支援のプロセスとして①アセスメント、②クラス支援計画の作成、③チームによる支援の実施、④評価（振り返り）の4項目を通して取り組んでいく。

① アセスメントの実施

拡大学年会を開催し、関係する複数の教職員等が参加して、生徒に関する情報収集・分析を行い、支援の暫定的な目標や方法を検討する場面を設定する。これにより暫定的だが生徒のつまずきの原因や背景、悩みや不安、問題の程度などが明確になる。

② クラス支援計画の作成

アセスメントに基づいて、問題解決のための具体的なクラス支援計画を、「クラス支援シート」を活用し作成する。担任、教科担当、学年主任、養護教諭、生徒指導担当、教育相談係などそれぞれの視点から得られる情報をまとめ、「だれが（支援担当者）、どこで（支援場所）、どのような支援を（支援内容や方法）、いつまで行うか（支援期間）」などを記載したクラス別の支援計画を作成する。その際、各クラスの「クラス支援シート」については、校内LANにデータファイルを載せ、他部署、他学年への周知、共通理解を図る為の連携・協力体制を作る。また「クラス支援シート」の集約などについては、コーディネーターが中心となって行い、支援目標を達成するために共通理解から行動連携へと繋げていく。

③ チームによる支援の実践

「クラス支援シート」による支援計画に基づいて様々な立場で支援を実施する。その際、これらの支援の実施についてはそれぞれの先生方の負担感が増すことのないように、通常業務内での支援内容に留意する必要がある。また、支援の実施期間中は、積極的にコーディネーターが中心となって、情報をもとに先生方を「繋ぐ」ことで、より効果的な支援が展開できる。さらに、コーディネーターは担任、教科担当などの反応・変化についての経過報告により支援の内容や進捗状況を把握する。効果的な支援については継続・発展させ、それ以外の支援については廃止・改善する必要がある。その際、支援状況を誰でも確認できるように、校内LAN上にあるデータは常に更新する必要がある。

④ チームによる支援の評価（振り返り）

クラス支援計画で設定した支援内容の達成状況については、学期末や学年末に拡大学年会や学年会において、総括的に振り返りを行い、次年度や新学期に向けた支援の継続・廃止及び付加・修正なども含めたチームによる支援の在り方を見直す。

(3) コーディネーターについて

諸富（2013）は生徒指導に関する会議は「生徒指導提要には『チームの実施段階では、コーディネーターが中心となって定期的にケース会議を開催』するとあるようにケース会議のリーダー役を務めるのは、生徒指導主任の役目」であると述べており、生徒指導部がクラスにおける課題についての話し合いのコーディネーター役を担当する。またコーディネーターは、話し合いの流れ、日程の説明、資料作成、会の進行などの役割を担う。

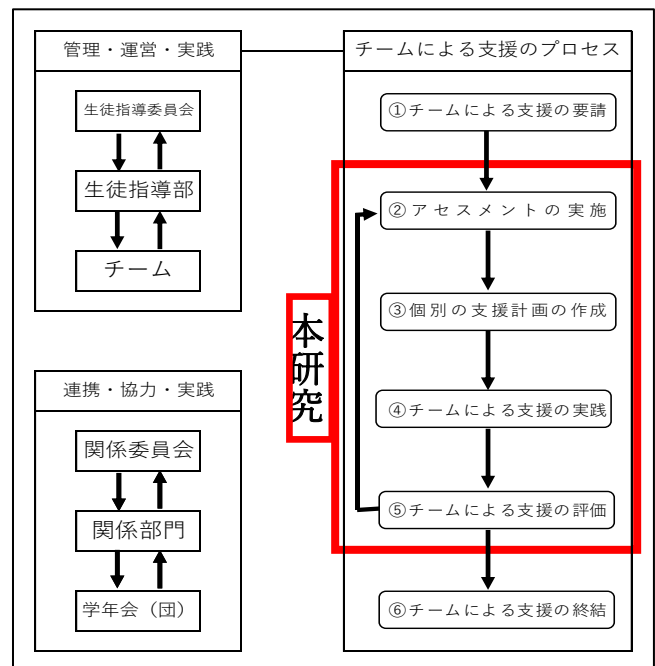


図3 チームによる支援のプロセス
（文部科学省 2010 「生徒指導提要」より）

3 アセスメントについて

(1) アセスメントについて

八並・國分（2008）によると「生徒指導では、アセスメントすなわち生徒理解が問題解決の成否に大きく関わっている」「教師の経験に裏打ちされた勘や主観的理解は大切であるが、それに加えて、より幅広く、深いアセスメントを行う必要がある」と述べている。

また、教師は、生徒の問題行動という表層に現れた行為の抑止に力点を置く傾向にあり、問題行動の深層を理解することによって、問題解決に向けての糸口や、教師・保護者・周囲のより良い関わり方やサポーターも決まってくるということを感じている。

これらのことをふまえ、本研究において、アセスメントする材料として、学校環境適応感尺度「アセス（ASSESS：Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres）」を使用する。栗原・井上（2010）によれば「適応とは、個人と環境との相互作用や関係を表す概念で、『個人と環境の調和』として定義づけられている。『適応感が低い』とは本人がSOSを発信しているということ。このSOSの度合いを測り、先生方の観察やその他のデータと照らし合わせることでよりの確な支援を構築する指標として有効である」と述べており、次の6つの側面から学校適応感をとらえている（表3）。

また、本研究において「アセス」の数値は、主にクラス支援に向けた指標として活用する。

表3 「アセス」が表す6因子

因子	内容
生活満足感	生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度で、総合的な適応感を示している。
教師サポート	担任（教師）の支援があるとか、認められているなど、担任（教師）との関係が良好であると感じている程度を示す。
友人サポート	友だちからの支援があるとか、認められているなど、友人関係が良好だと感じている程度を示す。
向社会的スキル	友だちへの援助や友だちとの関係をつくるスキルを持っていると感じている程度を示す。
非侵害的サポート	無視やいじわるなど、拒否的・否定的な友だち関係がないと感じている程度を示す。
学習的適応	学習の方法もわかり、意欲も高いなど、学習が良好だと感じている程度を示す。

(2) 「クラス支援シート」について

「アセス」の結果を主体とし、各担当職員の役割において、クラスまたは個人を見立て、支援策を検討・実施に向けて記録するシート「クラス支援シート」を作成する。また対象クラスや生徒の情報を可視化、支援方針や支援方法の共有及び支援者の役割分担を明確にし、効果的な支援に繋がるための手立てとして「クラス支援シート」を活用する。さらに、定期的に支援の振り返りや見直しを行い、PDCAを繰り返すことで継続した組織的支援ができると考える。

Ⅲ 研究の実際

1 実態把握と分析

本研究を進めるに当たっては、支援の課題を明確にする目的で、本校でおこなった過年度の「学校評価アンケート」や、「生徒実態調査アンケート」により分析を行った。

(1) 生徒の現状

平成26年度に商業科独自で行ったアンケートによると、「本校に入学して満足しているか」との問いに、78%の生徒が「満足」「やや満足」と答え、22%の生徒が「やや不満」「不満」と答えた。「不満」の内容の内訳をみると、「学校・クラスの雰囲気が悪い」20%、「授業内容に興味・関心が持てない」18%、「友人関係がうまくいってない」16%、「授業が難しい」13%、「検定試験があるから」1%、「その他」32%の結果であった。「その他」の中身についての記述に

は、「身なりが厳しすぎるから」「校則を減らした方がいい」など生徒指導上の不満が多数見受けられた。さらに過年度の学校評価を比較すると、ほとんど差は見られなかった。「本校の生徒にはいじめや暴力はない」と「先生方はいじめや心の健康問題等にきちんと対応している」においては、「できている」「ほとんどできている」「一通りできている」と肯定的な意見が大半を占めていた。今後は「不満」「やや不満」という回答は、生徒が発信するＳＯＳや問題行動などに至る前段階と捉え、学校生活の満足度を高める試みも必要だと考える。

(2) 職員の現状

平成 26 年度から平成 28 年度までの、学校評価アンケート 3 ヶ年分の結果から考察した。12 問の設問のうち生徒指導に関する設問があり、職員においては、「生徒指導・教育相談・学年会等の連携強化」がうまく機能しているという認識があり、数値も良好に推移している。今後はこれまで以上に、生徒間、教師間においても関係強化を図り、開発的・予防的生徒指導の基盤を作っていくたい。

2 チームによる支援を取り入れた拡大学年会の実践

(1) 本実施計画について

本研究を以下の日程で行った（表 4）。11 月 2 日の学年会においてチームによる支援を説明し各担任へ協力を依頼した。11 月 16 日には「クラス支援シート」を活用しながら、支援策を話し合い、それぞれの支援期間に入った。そして、12 月 26 日には全体の職員会議では、本研究の経過報告を行い、本研究テーマについてのアンケート実施に至った。

表 4 本研究実施計画

時期	内容	話し合う場
11 月 2 日	・チームによる支援について説明 ・「アセス」の実施・分析	拡大学年会
11 月 16 日	・クラスの課題等などに対する支援策を策定等	学年会
	拡大学年会以後支援開始	各先生方
12 月 26 日	・支援実施検証（研究途中経過報告・アンケート）	全体会
	・支援後の変容 ・次年度引き継ぎ等	各担任 各先生方

(2) 実際の取組について

① アセスメントの実施

チームによる支援を実践するにあたり課題、支援等の内容の可視化を目的とした、「クラス支援シート」を作成し、2 学年の拡大学年会に参加した（写真 1）。その際、所属学科（情報システム科）の生徒の状況把握の為、「アセス」の数値は、新年度初めにサンプリングしたものを反映させた。

そして、この拡大学年会の後半に時間を設定し、本研究の説明及び「アセス」の数値が入った「クラス支援シート」の説明を行った。「クラス支援シート」は記入式で、一週間



写真 1 拡大学年会の様子

期間を設けて、普段の業務内容で心がけていることなどを記載してもらった後、回収、支援策などをまとめる方法を説明した。その後、学年会終了時に、本研究及び「クラス支援シート」についてのアンケートを行った。設問 1「この取組（研究）について趣旨（意図すること）は理解できたか」、設問 2「この取組（研究）についてどう感じたか」設問 3「担任だったら（現在担任でも）『アセス』をやってみたいか」との問いに対して、肯定的な意見が大勢であった。しかし、「アセス」を行う際、じっくりアンケートを行う時間の確保が不十分などの理由や、支援シートへ記載する際、記述式ということもあり、「多忙感」と「わずらわしさ」という課題があることが、アンケート結果から分かった。

② クラス支援計画の作成

拡大学年會終了以降、先生方へ「クラス支援シート」の記入方法など、直接インタビューを行い、課題の収集を行った。また、支援策をまとめるために、回収期限を設けてあったが、回収率が低かった。理由として大半の職員が通常業務に追われている等であった。すなわち、このチームによる支援体制作りを進めていく際、最大の課題は職員の「多忙感」だと感じた。よって、この課題を改善するために、クラス支援シート(改訂版)(図4)を作成した。事前にアンケート調査した「アセス」の数値(図5)に加え、改良点はエクセル機能の「ドロップダウンリスト」を利用し、「クラスの状況で気づいたこと」「手立て」「変容・課題・要望」など、キーワード群の中から適語を選択できるようにした(図6)。適語は複数の先生方からインタビューを行い、使用頻度が高いキーワードを掲載してある。

③ チームによる支援の実践

チームによる支援は、担任、教科担当、生徒指導担当、学年会、教育相談係、養護教諭がそれぞれの立場で、生徒との関わりを通し、「気づき」を繋いで、結果的に問題行動に至る前に早期発見、未然防止に資するものと考えている。その際、職員側の「多忙感」「わずらわしさ」などに留意する必要がある。

今回の実践は2学年を対象とし、受け持つクラスの中で2年5組を中心に行った。それぞれの先生方の負担感が少なく支援ができるよう、日常の業務内で行える手立てを考え、実践をしてもらった。

ア HR担任

生徒について、「明るい」「元気」という雰囲気を感じつつも「大人しい」一面も垣間見え、「気になる生徒がいる」という所感であった。手立てとして、朝のSHRや帰りのSHR、LHRなどの時間を活用し、朝の教室整備(写真2)や学校行事「具商デパート」を見据えた挨拶練習(写真3)を行っている。生徒にとっては1日の学校生

対象クラス：2年5組		クラス支援シート		取扱注意	記入者：	11月16日
アセス数値によるクラスの状況						
	適応次元の特徴	初回数値	教科担当	学年主任	生徒指導	
生活満足感	生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度で、総合的な適応感を示します。	55	手立て 静か 無気力 やる気のある生徒が	手立て 興味を引く授業 励励をする	手立て 元気 声かけ 見守り	手立て 気になる生徒あり 指導的役割を担い一掃
教師サポート	担任の支援があるとか、認められているなど、担任との関係が良好だと感じている程度を示します。	58				
友人サポート	友達からの支援があるとか、認められているなど、友人関係が良好だと感じている程度を示しています。	51				
向社会的スキル	友だちへの援助や友だちとの関係をつくるスキルをもっていると感じている程度を示します。	51				
非侵害的關係	無視やいじわるなど、拒否的・否定的な友だち関係がないと感じている程度を示します。	56				
学習適応	学習の方法もわかり、意欲も高いなど、学習が良好だと感じている程度を示します。	55				
※数値について 50＝平均 40未満＝支援ニーズやや高 30未満＝支援ニーズ高						
NO	氏名	アセス数値による気づき	教科相談	担任	養護教諭	
			手立て 明るい 声かけ 静かな者も多い 気になる生徒あり	手立て 明るい 声かけ 見守り 元気 LHRの有効活用 気になる生徒あり	手立て 気になる生徒あり 指導的役割を担い一掃 SA-netを活用 担任一掃 個人指導	
			変容・課題・要望	変容・課題・要望	変容・課題・要望	

図4 クラス支援シート(改訂版)

対象クラス：2年5組		アセス数値によるクラスの状況	
	適応次元の特徴	初回数値	
生活満足感	生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度で、総合的な適応感を示します。	55	
教師サポート	担任の支援があるとか、認められているなど、担任との関係が良好だと感じている程度を示します。	58	
友人サポート	友達からの支援があるとか、認められているなど、友人関係が良好だと感じている程度を示しています。	51	
向社会的スキル	友だちへの援助や友だちとの関係をつくるスキルをもっていると感じている程度を示します。	51	
非侵害的關係	無視やいじわるなど、拒否的・否定的な友だち関係がないと感じている程度を示します。	56	
学習適応	学習の方法もわかり、意欲も高いなど、学習が良好だと感じている程度を示します。	55	
※数値について 50＝平均 40未満＝支援ニーズやや高 30未満＝支援ニーズ高			

図5 クラス支援シート(一部拡大その1)

教科担当	
クラスの状況で気づいたこと	手立て
静か	興味を引く授業
無気力	励励をする
やる気のある生徒が	
特になし 【良いキーワード】 明るい 元気 雰囲気がいい まじめに取り組む 授業に向かう姿勢が 静か	
変容・課題・要望	

図6 クラス支援シート(一部分拡大その2)

活の中で、特に生徒と関わりのある教師がHR担任であり、その先生から、出番や役割が与えられ、目標を達成することで、自己有用感が大きく向上することに繋がると考える。



写真2 教室整備の様子



写真3 挨拶練習の様子



写真4 課外講習の様子

イ 教科担当

「静か」「無気力」「教科に偏りがあるかも」「まだまだ成長可能」と教科担当の先生方が感じていた。手立てとして、学習的適応を重視した取組を行っている。教科担当によっては、少数自主的参加型の早朝の時間を利用した課外講習（写真4）や、追試支援期間の学習支援、資格取得を目標においた検定対策講座を行っている。

ウ 学年主任

「元気」だと感じる一方で、「もう少しできるだろう」と期待を寄せていた。そのことも踏まえ、手立てとして行事活動や定期考査など、学校生活の充実を目的とした学年集会を実施し、普段から声かけ、見守りを行っている。また、先生方へのアプローチとして、当該学年のクラス状況を把握し、適宜担任の先生方へサポートに回る姿勢で臨んでいる。

エ 生徒指導担当

身なり指導の重点期間や遅刻防止週間を設けてみるなど、勤怠状況の変化から読み取れる生徒の様子を、生徒指導部内で情報共有をして、声かけ、見守りを意識的に行った。また、普段から朝登下校時に積極的に声かけ活動を行っている（写真5）。生徒とコミュニケーションを取りながら、表情観察や身なりの様子から生徒の変化を感じ取っている。変わった様子の生徒がいれば、部内でも共有し、必要性を見出せば担任や他部署と連携し、すぐに面談や家庭連絡を行うなど、常に学校生活を見守る状況にある。さらに、複数の先生方で支援を行うことで、生徒理解の深化とお互いの信頼関係構築がさらに充実すると考えている。

懲戒指導件数においては、平成28年度は、平成26年、平成27年に比べ、減少した（図7）。具体的な取組として指導部は職員と生徒との信頼関係が密になることが重要だと考え、コミュニケーションを大切にし、お互いの信頼関係構築に努める雰囲気作りに務めた。さらに、職員向けには、それぞれのクラスが抱える困り感や課題への対応策など、一緒に考えながら、常に担任を支え、見守る姿で関わっている。生徒向けの取組としては「生徒指導部通信」の発行が挙げられ



写真5 登校時の声かけの様子

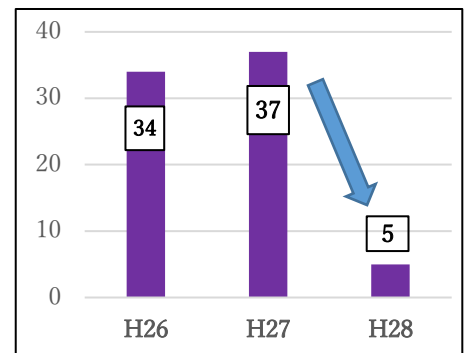


図7 本校の懲戒指導件数の状況（件）

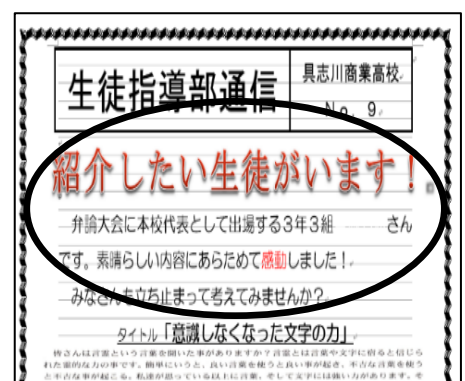


図8 「生徒指導部通信」1

る(図8、9)。問題行動の未然防止のような内容にとどまらず、各行事などでの生徒の活躍や資格取得及び部活動での好成績など多岐にわたる記事を、生徒の笑顔や頑張っている様子の写真を中心に掲載し、興味をひく内容と、「褒める」メッセージを意図的に併せて発信した。大人側からの承認と激励のメッセージを発信することで、自己肯定感や学校生活の満足度の向上が期待できると考えている。

このような姿勢で臨みながら問題行動が起きる前に生徒たちの変化に気づき、関わる機会を多く持った結果、問題行動の防止につながったと考える。ひいては今回研究テーマにあるようにチームによる支援を推進することで、開発的・予防的生徒指導に繋がると考える。

オ 教育相談担当及び養護教諭

生徒個々によって違った家庭状況や健康管理面での困り感に寄り添い、担任やその他の先生方へとフィードバックを繰り返す関わりが中心となった。また、スクールカウンセラーの活用も図られ、より内面や生活背景を含めた生徒理解の深化によって、より良い支援に繋がったと考える。

④ チームによる支援の評価(振り返り)

学期末、年度末に、「クラス支援シート」の「変容・課題・要望」の記載から分析することとした。本研究においては支援期間が短く、クラスの様子は「変わらない」と答える先生がいる。しかしその他には、「気になる生徒がいる」「行事疲れが目立つ」「努力の跡がみられる」など先生方それぞれの視点で、クラスの何らかの変化に「気づき」が感じられた。また生徒指導部室には、生徒の情報共有のために足を運ぶ職員が増えるなど「気づき」から「繋ぎ」へと変化が見られた。このことから、それぞれの先生方が連携、協働することで予防的生徒指導の土台になると考える。

(3) 今後の実践に向けて

① 事後アンケートの考察

チームによる支援のまとめとして、それぞれの役割を実施した支援について評価(振り返り)を行った。同時に、全職員へも実践内容の報告も兼ね、アンケートを実施した。「質問1」(図10)は、2学年以外(取組対象外の先生方)の職員に対する質問、「質問2」(図11)、「質問3」(図12)は2学年に関係した職員(取組対象の先生方)に対する質問である(職員会議参加人数43名、アンケート回収35名分、回収率81.4%)。「質問1『チームによる組織的対応』を拡大学年会に取り入れてみたいか?」との問いに、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」との肯定的意見が19名(95%)で、記述欄には「拡大学年会の時



図9 「生徒指導部通信」2

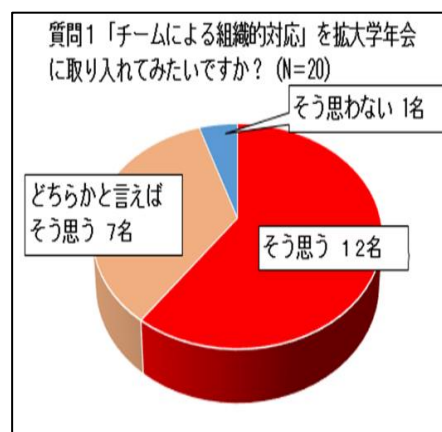


図10 アンケート結果 その1

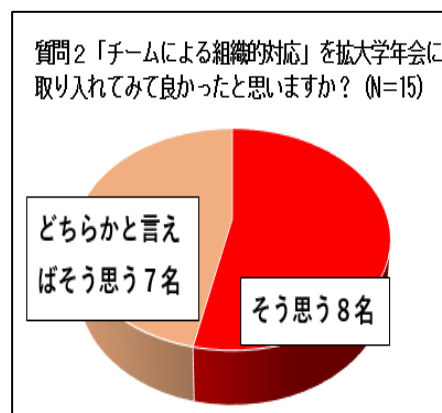


図11 アンケート結果 その2

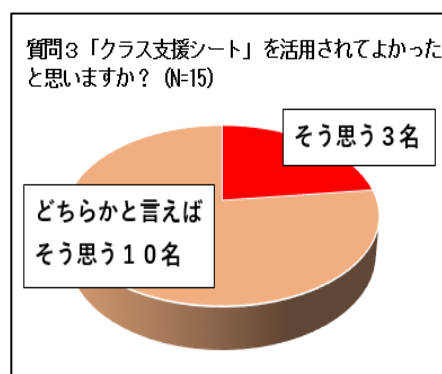


図12 アンケート結果 その3

以外にも情報をシェアできるので有用だと考える」「今の指導は個人では限界があると思う。多様化する生徒や問題に組織的に対応できれば良いと思う」「拡大学年会がただの情報共有だけで終わるのではなく、具体的な対応策等の確認ができればなお良いと思うから」といった意見があった。一方、「そう思わない」と答えた意見としては、「先生方の自主的な繋がりを大切にしたいと思う」とあった。「質問2『チームによる組織的対応』を拡大学年会に取り入れて良かったと思うか?」「質問3『クラス支援シート』を活用して良かったと思うか?」のいずれの問いにも「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えた先生方がほとんどという結果が得られた。

以上のことから、「チームによる組織的対応（チームによる支援）」及び「クラス支援シート」の活用の有効性は感じられるものの、業務量に伴う負担感にも配慮が必要だと認識できた。これらの目的として通常業務内での生徒指導や生徒及び職員間の「気づき」と「繋がり」であり、丁寧な説明を繰り返し行う必要がある。また、効果が現れる事によって負担感の軽減に繋がると考える。

② 年間計画（案）について

今回一通りの流れを通し、先生方のインタビュー、事後アンケート集計結果を踏まえ、「チームによる支援を取り入れた拡大学年会実施要項（案）」（対象生徒、クラス、役割分担など）を作成した（図13）。役割分担について偏りもあり、今後学校の状況なども含め、検討、修正を行っていく必要がある。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- 「クラス支援シート」を活用することでクラスの状況や課題事項の把握、各担当の支援方法の共有等、クラスの支援に向けた取組の効率化・機能化を図ることができた。
- 拡大学年会の「クラス支援会議（仮）」にチームによる支援を取り入れたことで、開発的・予防的生徒指導を目指した生徒指導体制作りの一方途となった。

2 今後の課題

- チームによる支援を取り入れた拡大学年会の「クラス支援会議（仮）」をより効果的、機能的、継続的に実施できるような方策の検討を行っていく。
- 開発的・予防的生徒指導について実践研究を進め、学校の実状に合わせた支援方法・支援体制作りの検討・検証を継続的に取組む必要がある。



図13「チーム支援を取り入れた拡大学年会」年間計画（案）

〈参考文献〉

- 文部科学省 2017 『平成 28 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（速報値）』
- 沖縄県教育庁 2016 『平成 28 年度県立生徒指導の手引き』
- 石川美智子 2015 『チームで取り組む生徒指導』
- 諸富祥彦 2013 『新しい生徒指導の手引き』
- 山口県教育委員会 2011 『よりよい生徒指導にむけて』
- 栗原慎二・井上弥 2010 『アセスの使い方・活かし方』
- 文部科学省 2010 『生徒指導提要』
- 八並光俊・國分康孝 2008 『生徒指導ガイド』
- 倉木哲夫 2007 『開発的生徒指導論と学校マネジメント』
- 坂本昇一 1990 『生徒指導の機能と方法』